

ジョウロ

2024. 6. 10

幼稚園のすぐ近くに、「かがやきふぁーむ」と名付けられた畑がある。近所の方からお借りしているものである。そこでは、幾種類もの野菜が栽培される。苗を植えたり、種をまいたり、水をやったりするために、天気がいい日には、よく出かけている。

その日も、いつものように、5歳児と4歳児が仲良く手をつないで畑へと向かった。5歳児の手には、ジョウロがある。水やりのためである。畑に着いた。すると、ジョウロを忘れてしまった5歳児がいることが判明した。

さて、どうするのか。「先生たちは、畑でやることがあるから、ジョウロを取りに、〇〇くんと一緒に幼稚園には戻れないなあ」とまず投げかける。ここから、子どもに考えさせるわけである。多くの子どもはここでかたまるだろう。「〇〇くん、どうしたらいいだろうね」子どもは困っている。きっと、何かしらは考えているのだが、それを行動に移すこと、それを言葉にして話すことはむずかしい。

先生はというと、〇〇くんに考えさせながらも、全体に指示を出したり、一人一人の園児たちに声をかけたりしている。時間がかかっても、ずっと考えさせた。「〇〇くん、言葉にしないと伝わらないよ」先生からは、“解決策”という言葉が何度か出てきた。そうである。子どもに解決策を考えさせているのである。

専属カメラマンとして写真を撮りながら、何気なく、その様子を見ていた。先生は、〇〇くんに生きる力、生き抜く力をつけさせているように思えた。まさしく、教育がそこにはあった。かがやきふぁーむは、教育の場だった。

結局、〇〇くんは、どうしたか。お友達に話しかけ、ジョウロを借りることにしたようだった。〇〇くんは、ちょっとした失敗から、何を学んだのだろうか。「〇〇くん、忘れてしまったの。じゃあ、お友達に借りようね。△△くん、貸してくれる」と先生がフォローしてしまうことも可能だろう。だが、我が園の先生は、そうはしない。子どもに解決策を考えさせる。

その後、〇〇くんは、徐々に元気を取り戻し、みんなと一緒に種をまいていた。きっと、心の中では、「ああ、どうしたらいいんだ。お友達に借りようかな。どうしようかな」と葛藤があったことだろう。先生は、そんな子どもの気持ちがよくわかっているのだろう。

「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という言葉がある。「人生を生き抜く力は、かがやきふぁーむで学ぶことができる」ということだろう。畑の野菜がぐんぐん生長するように、子どもたちもどんどん成長してくれることだろう。